

韓国の成人未婚女性の親子関係と自立困難の経験 —母親・父親・娘のマッチング・データの分析から—

尹 鈺 喜
(ジェンダー学際研究専攻)

1. 問題設定

本研究の目的は、韓国の成人未婚女性が経験している自立への困難を親子関係の側面から原因を探ることである。近年、先進国を中心に若年層のニート・フリーターの増加といった雇用問題（本田，1997）、未婚化・晩婚化といった若者の家族形成の困難（宮本，1997）、パラサイトシングル・ひきこもりといった若者の親への依存（山田，1999）などの現象から、若者の自立をめぐる家族が困難を経験していることが社会問題化している。

このような現象に対して、日本の家族社会学研究では、戦後日本の経済的側面に規定された親子関係の特殊性という観点から説明をする傾向が見られる。具体的には、高度経済成長によって豊かな経済力を獲得した親世代が、結婚をしていない子どもに対して経済的支援を長期にわたって行っていることが指摘された（宮本，1997）。このことが、たとえ就職をしても豊かな生活を維持したい子どもが、親との同居を継続し、逆に現状よりも生活水準が低くなるような親元からの自立や結婚を避ける要因となり、結果としてパラサイトシングルや未婚化・晩婚化を増加させたと説明されたのである（山田，1999）。そこには、功利主義的な子どもの態度に対する批判が存在していたと考えられる。しかし、2000年以降の世界的な不況から、日本社会の若年層における就業問題、非正規雇用問題による貧困化がより深刻な局面を迎える中で、労働社会学や教育社会学の分野から、若者の自立の遅れは家族社会学が指摘したような子どもによる合理的な選択というよりは、雇用状況や経済格差といった社会の構造的な条件によって規定されていることが指摘されるようになったのである（宮本，2004）。

一方、日本の若者の自立困難に社会的関心が集まるのと相前後して、韓国社会では、1997年の国際通貨危機（IMF）の影響で若年層の失業率が急激に上昇した。経済不況は、公務員など安定的な職種を目指す「就職浪人」を大量に生み出し、モラトリアムとしての大学院進学をする者が増加

するなど、若者の自立の遅れが顕著になっていたのである。

このような状況を韓国の経済学者は政治経済的な問題として指摘するようになった（尹他，2005）。しかし、若者の自立を困難にする要因は社会経済的な状況だけではなく、子どもの親への服従や孝規範といった韓国社会において支配的な家族主義的な文化・規範などの特徴によるものであるという指摘もある（尹，2009a；尹，2009b）。また、親から求められる自立の内容には性別による差が見られる（尹，2009a；尹，2009b）。息子の場合、親が経済的・社会的な成功を強く希望し、息子の意思よりも親自身の意思を強制していた。そして、その親の強制は、子どもの未来のために、親の犠牲、孝規範、といった論理構造によって正当化されていた。一方、息子側は、良好な親子関係を持続するために孝規範を受容する一方、親からの支援を利用するためといった功利的な認識を取ることで対抗的に現状を正当化していた（尹，2009b）。本研究では、娘の親子関係に焦点を当て、成人未婚女性が経験している自立の困難を探ることとする。

一方、従来の若者の自立研究には、理論・方法論的な問題が考えられる。日本の家族社会学研究では若者の自立の困難は、子どもの経済的合理性に基づいて説明される一方で、韓国の家族社会学研究では、子どもが家族主義的な規範や文化の社会化を通じて内面化した結果であると捉えられている。これらの分析は、日韓両国の社会状況がある程度適切に捉えているが家族構成員の個人の意思を描くことには限界があったと考えられる。こうした研究に対して近年は、文化・規範に対する個人の盲従的な傾向を持つ構造機能主義的な方法論や、過度な功利主義的な人間像を想起させる合理的選択理論を強く批判し、経済的な状況に制約され、文化・規範に拘束されても、なお、そのような状況に対して主体性を発揮している家族成員を捉える必要性が求められている（田淵，1999a；田淵，1999b）。若者の自立に関する研究においても、個々の家族構成員の行為における合理的選択という側面と、文化・規範の受容の双方に目配りした統一的な説明が可能になるのである。

家族構成員の主体性を重視した新たな家族社会学理論を若者の自立をめぐる家族の困難についての研究に適用することは、従来は断絶していた個人と社会を架橋し、ミクロとマクロをリンクする議論をも可能にするのである。すなわち、日本であれ韓国であれ、世界的な経済不況の中で構造的な経済状況が若者の自立を困難にしているという説明は、責任の主体を若者個人から社会の問題へと転換させることには成功した一方で、そのような社会的な条件の中で、若者およびその家族が何を感じ、どのような経験しているかについて明らかにすることを、見えにくくさせてしまったと言えるのではないだろうか。

よって、家族の中で構造的に制約された経済的な資源を若者がいかに利用し、社会的に規定された文化的な規範に、若者がいかに対峙しているかを明らかにする新たな家族社会学の行為理論は、社会的なるものと個人的なるものを断絶させていた従来の考察の限界を乗り越える新たな視点をもたらすのである（田淵，1996）。

2. 研究の方法と対象

そこで本研究では、自立に困難を抱えている若者のみならず、その親たちも対象としたインタビュー調査、いわゆる「羅生門的手法」を利用した方法を用いる。この手法は、従来、家族の集団的特性が自明視され、個々の家族構成員の主体性が軽視された研究とは異なり、同一家族の内部においても家族構成員同士において認識の相違が存在し、異なる経験をしていることを浮かび上がらせるのである。

ここでは、子どもの大学進学、就職、結婚といった重要なライフイベントにおいて、親子の認識のズレが把握可能となる。そして、最終的な意思決定に至る過程で、若者の自立をめぐる家族の困難が本当の意味でリアリティを持った形で明らかになると考える。

本研究は、2008年8月、2009年10月の2回に渡り、韓国のソウルと京畿道に居住し、かつ親と同居をしている20代後半～30代前半の成人未婚女性（以下、娘）4人とその父親、母親を対象に半構造化したインタビュー調査を行い、そのデータに基づいて分析を行った¹。対象者の選別は、著者の知人から始まり、次々に紹介してもらいスノーボール方式で行った。娘のみ、親のみでインタビューを行ったケースもあるが、本研究では、娘、父親、母親ともインタビューに応じたマッチング・データのみを分析対象とした。インタビューは、それぞれ対象者の自宅に訪問し、まずは基本的な属性に関する質問紙に記入してもらい、1～2時間程度ヒアリングを行った。その際、お互いのインタビュー内容が他の家族に聞こえないように、部屋を設けて1人ずつインタビューを行った。インタビュー内容は、娘

のライフイベントの出来事について自由に語ってもらった。

対象者の内娘の属性は、年齢が26歳～30歳であり、4人とも大学卒業者（3年制の看護大学が2人、4年制の一般大学が2人）で、そのうち1人が教育大学院で修士学位を取得した。職業については、4人のうち2人が看護師、2人が求職中である。

親の年齢は、父親の年齢（55歳～66歳）が母親の年齢（51歳～61歳）よりもやや高く、学歴においても、父親の方（大卒2人、高卒2人）が母親（大卒1人、中卒3人）より高い。母親は、専業主婦が2人、自営業1人、パートが1人であった。（[表1] 参照）

3. 事例分析

成人未婚女性の自立をめぐる親子の中でどのような行為が行われているのかを探った結果、親子間における規範のズレが確認できた。本研究では、大学の専攻選択と結婚に焦点を当て、親子の認識や規範のズレを紹介する。

1) 大学の専攻選択をめぐる親子の規範のズレ

a. 親子の異なる規範について

親子の語りの中で、娘の自立に関するもっとも重要なイベントの一つは大学入試であった。インタビュー対象者が大学入試を経験した1990年代後半～2000年代前半は、大学への進学率が男女ともに高校卒業者の7割以上を占めており（韓国統計庁，2000）、高等教育の機会における男女差がほぼなくなった時代である。しかし、こういった「機会の平等」とは裏腹に、娘の大学専攻の選択において親子間の意見の相違による葛藤が見られた。

娘1の場合、は大学でバレエを専攻したいという希望を親の頑固な反対によって挫折したケースである。彼女は、高校1年生の時に先生からバレエを勧められ、稽古を受けたり、バレエサークルに入って練習するなど、大学に入ってバレエを専攻したいと真剣に考えたが、親の強い反対によって夢をあきらめたという。以下に、娘1の語りを引用する。

娘1：お父さんがちょっと保守的で「芸術・体育系は費用も多くかかるし、あなたは運動神経もないから勉強の方がいい」と反対もあって、（略）お母さんも私が運動するつもりでバレエをするのは喜んでいましたが、それで進路を決めることについては「あなたを知っているけど、そんなに運動が得意じゃないし、いつも転ぶのにうまくやれる？そして、バレエをする子はふつう子どもの頃から始めるけど、あなたは始め

[表 1] 対象者の基本属性

区分	名前	年齢	学歴	就労状況	年収* (単位:円)	他の子	居住地
家族 1	父 1	56 歳	大学	自営業	500 ~ 600 万	次女 (16 歳): 同居 / 未婚	ソウル
	母 1	55 歳	大学	自営業	—		
	娘 1	26 歳	大学院 (修士)	幼稚園の英語教師 (アルバイト) →就活 (教員試験)	100 万未満		
家族 2	父 2	62 歳	高校	保安職 (正社員)	100 万未満	長男 (37 歳): 別居 / 結婚 長女 (35 歳): 別居 / 結婚 三女 (28 歳): 同居 / 未婚	京畿道
	母 2	60 歳	中学校	事務職 (パート)	100 万未満		
	娘 2	30 歳	短大 (3 年)	看護師 (正社員) →休職 →医療コーディネーター (正社員)	200 ~ 300 万		
家族 3	父 3	55 歳	高校	専門職 (正社員)	700 ~ 800 万	次女 (25 歳): 同居 / 未婚	京畿道
	母 3	51 歳	中学校	専業主婦	—		
	娘 3	26 歳	大学	出版社 (正社員) →日本留学 →本屋 (アルバイト) & 就職活動	100 万未満		
家族 4	父 4	66 歳	大学	教員 (正社員) →退職	300 ~ 400 万	長女 (36 歳): 別居 / 未婚 次女 (33 歳): 別居 / 結婚	ソウル
	母 4	61 歳	中学校	専業主婦	—		
	娘 4	30 歳	短大 (3 年)	看護師 (正社員) →看護師 (正社員) (病院の移動)	200 ~ 300 万		

* 年収の場合、対象者には韓国の貨幣単位である「ウォン」に記入してもらい、筆者が「円」に換算した。

るのが遅すぎたから、勉強をした方がいいと思う」と言ったので、私も勉強する方向に気持ちを変えました。

つまり、娘 1 は、父母が主張する、「運動神経がない」、「そんなに運動が得意じゃない」、そしてバレエを「始めるのが遅すぎた」という理由で「勉強した方がいい」と勧められ、「勉強する方向に気持ちを変えた」のである。一方、母親は、娘の大学進学について次のように語った。

母 1: あの子は芸術・体育系の方で、写真やバレエというのをやりたがっていたけど、私が「勉強しなさい」と。「勉強をして (大学に入って)、その後、職業を得て、芸術・体育系をやりたいなら趣味でやりなさい」と勧めたの。芸術・体育の方はちょっと大変だと思って、芸術・体育系の方に行くと就職とかが… 安定的な職業生活をするとか、そういうのが難しいと思って。今考えると「娘が行こうとした道に進んだらもっと良かったんじゃないか…」という気持ちもあります。だけど、○○ (=娘 1) がまだ若かったので (娘自身が) どうすればいいか分からないので、母として本当に悩みましたよ。(略) お父さんも反対して結局は諦めたの。本当に、本当に反対が激しかったので、仕方なかったの、あまりにも反対するから。それで、英文学科の方が将来に使えるところがあると思って選択したのよ。

母 1 は、娘 1 の大学進学に当たって「バレエをやりたい」

という娘の希望よりも「勉強して」ほしいという親の意思が優先されたことを認識していた。母 1 が娘 1 の希望を反対した理由については、娘が「まだ若かったので (娘 1 自身が) どうすればいいか分からない」ため、娘の将来を母の義務として一緒に悩むべきであると認識していることがうかがえる。また、娘の将来の「安定的な職業生活」への不安が大きな原因の一つとして考えられる。つまり、母 1 は、子どものやりたいことの「希望」よりも子どもの安定的な「将来」を重視したのである。ところが、父 1 は、娘が大学の専攻として「英文学科」を選択したのは、「本人の意思に任せた」結果であると語っていた。

父 1: (娘の大学の進学は) 本人の意思に任せました。今やっていること (=英文学) は、たぶん… 認めたと思います。今やっている英文学が…、それがちょっと (選択の) 範囲が広がったので、お母さんと相談して、その (=英文学科) 方が (将来的に) いいと (考えました)。そして、私の友人の中に教師が一人いるけど、そこにもちょっと助言を得て、それで英文学を専攻するようになりました。

父 1 は、娘が大学で英文学を専攻したことについて、「本人の意思に任せ」たことを強調したのは、父親自身が「自分の将来は自分で決めるべき」という規範を認識したためではないだろうか。しかし、父 1 が言う娘の「本人の意思」とは、父親の「認める」ものであり、母親との「相談」や、周りの「助言」を得た結果、もたらされたものである。「バ

レエ」ではなく、「英文学科」に進学せざるを得なかった娘は、その事実をどのように受け止めていたのだろうか。娘1は、「初めて私が本当にやりたいと思ったこと」への親の反対に関して「寂しい気持ち」を以下のように語っていた。

娘1：その当時は寂しい気持ちもたくさんあって、私がやりたいことなのに…そして初めて私が本当にやりたいと思ったことを見つけたのに、親が反対するから、はい…（諦めるということ）を決めるのがとても辛かったです。だけど、自分の心に素直になったら、(バレエという)運動ができる(ほどの)、そういった運動神経は足りないと思って、それで勉強することに決めたのです。

娘1の語りでは、「私がやりたいこと」、「本当にやりたいと思ったことを見つける」といった、将来の職業はやりたいことをすべきという規範の影響をうかがうことができる。結局、娘1は、父母が反対の理由として提示した「運動ができない」ことを「自分の心に素直になって」納得することで、父が言うような「本人の意思で勉強することに決める」ことで行為を正当化したのである。このように、娘の大学進学に当たっての専攻選択という場面において、子ども側が内面化した「やりたいことをすべき」、「自分の意思で選択すべき」という規範と、親側が支持する子どもの将来のために「安定的な職業を選択すべき」、自己決定ができない子どもの代わりに「親として選択する義務」という規範が互いに葛藤を生じていた。

b. 親子関係の中に存在する権力構造

大学での専攻選択において、娘が親の反対に抵抗し、自分の意思を通し続ける場合もある。娘2は、高校時代に勉強より運動に興味を持っていて、大学は社会体育学科に進学することを目指していたが、両親の反対にあったという。以下は、娘2の語りである。

娘2：それ(=剣道)もお母さんがすごく反対しました。お母さんはそういうのを(=運動について)よく分からないんじゃないですか。だから「なぜ棒で人を叩くことを習うのか、習いごとはいくらでもあるのに」って。だけど、私はそれが本当にやりたかったです。そして社体科(=社会体育学科)に行くためには自分の(自由)種目が一つ必要だったです。(略)それで私がアルバイトをして防具などを全部買って、稽古の月謝も私が全部まかさないました。(略)(社会体育学科を受験するためには)5種目とかの試験がありま

した。陸上、走り幅跳びといったことをやらなければならなかったのですが、レッスンを受けるのに25万ウォンがかかったのです、1ヶ月に。だけど、それは私には、とっても大きな金額でした。そういうのにお金が結構かかることもあったし、うん…私が疲れちゃったこともあって…それで、もう、それ(=運動)を辞めました。

娘2は、親の反対を押し切って社会体育学科に進学するために、試験科目にある基本5種目と剣道のレッスン費用や防具購入費などを稼ぐために放課後アルバイトをしていた。ところが、学校生活とアルバイトを並行しながら、運動の練習をする生活が大変だったので、一人で頑張るのに疲れてしまい、結局は社会体育学科に進学することを断念したのである。一方、父2は、娘の大学進学について次のように語った。

Q：高校の時、(娘2の)進路はどうやって決めましたか？

父2：自分(=娘2)が好きなように決めましたよ。(略)女の子が運動みたいなのをあれもやって、これもやって、剣道みたいなのも始めたけど、最後まではやらなくて…。

Q：剣道は趣味でやったのですか？それとも…。

父2：趣味、趣味でしょう。自分が好きであんなの(防具を)を持っていたり、家においたりして。

父2は、娘の大学の進学について「自分(=娘2)が好きなように決めた」と語り、娘が剣道を習ったことは「趣味」として認識していた。また、母親の語りも父親と同様である。

母2：(大学の)専攻は…(娘が)自ら決めて、(自分のことは)ちゃんと自分で決めていたから。親が話しても、親の言うことを聞きます？自分のあれ(=好きなこと)があるから、趣味があるから、自分でやった(=決めた)んでしょう。(略)私は、そのときは若かったので、仕事があってあれだった(=忙しかった)から、私が仕事をしていたから。

母2も、娘の大学専攻について「(娘2が)自ら決めて」と認識していた。ところが、母2は、娘が「(自分のことは)ちゃんと自分で決めていた」ということについて、その当時に「仕事があってあれだった(忙しかった)から」という理由で説明していた。つまり、娘のことについて親が気を配る余裕がなかったため、娘は自分のことを自ら決め

ざるを得ない状況だったのではないだろうか。娘2は、当時の親子関係について次のように語っていた。

娘2：子どもの頃からお父さん、お母さん二人とも働いていたので、学校から帰ってきてもいつも家に一人であるか、妹と二人だけで・・・だから、会話をする時間がほとんどなかったと思います。(略)お母さん、お父さんが、うん・・・ちょっと権威的だというか、それで、話をしても理解をしてくれないです。考えが違ふんです。私がやることに対してすべて否定的だから(親に)話したくないです。例えば、私が何かをしたくて、だから運動とかでも・・・私が習いたいことがあると、「あなたの意思じゃなくて、周りの人、だから、友達に惑わされて一緒にやりたいだけ」だと。だから、「他人がやるから、つられてやるだけ」だと。でも、私は本当に自分の意見を持ってすることなのに、いつもこんな感じだから、運動をやるとしても「どうせすぐ辞めるでしょう」と。

娘2は、両親とも働いていたので「会話をする時間がほとんどなかった」こと、自分がやることについて親が「すべて否定的」であったことに対して不満の気持ちを述べていた。また、娘2は、「自分の意思をもって」真剣に選択した運動に対しても、「他人がやるから、つられてやるだけ」という程度でしか受け入れられなかったことへの寂しい気持ちを語った。親からの経済的・情緒的な支援を得られなかった結果、娘2は社会体育学科に進学するのを諦めざるを得なかった。娘2の父母が言う「自分(=娘2)が好きなように決める」という行為は、娘の自己決定の尊重というよりは、親からの経済的・情緒的な支援が困難な状況の中で、子どもが自ら自己決定をしなければならないことを意味しているのではないだろうか。また、親の積極的な反対と同様に、親の支援なしではやりたいことを続けることができないことは、青年期における親子の非対称的な権力構造を表していると考えられる。

2) 結婚規範をめぐる親子の認識の相違

大学卒業後に、対象の娘たちは、就職、離家、結婚といった人生の様々な選択の場面に遭遇する。しかし、女性も社会進出すべきという近代的な女性の就業規範を内面かしている娘たちは、経済不況という社会的状況から就職による経済的な自立への困難を経験する。さらに、娘の自立に対する子ども側と親側の認識の相違は、就職、離家、結婚といった様々なライフイベントにおいても親子間の葛藤をもたらしている。

a. 「就職」と「結婚」をめぐる親子の葛藤

対象者4人の娘たちは全て就職をするべきだという意識を持ち、学業を終えた後、全員が就職活動を行っていた。しかし、対象者の娘たちが就職活動を行っていた90年代後半から2000年代の前半における韓国の経済状況は、97年の外貨金融危機をきっかけとして深刻な不況に陥っていたため、大学卒業者が新卒採用で就職することが非常に困難な時期であった。

娘3は、大学を卒業した後、翻訳の仕事に就くために塾に通ったり、半年間、特許管理事務所で働いたり、していたが、より良い就職を目指すために日本に留学することを決心した。日本で生活した1年間、アルバイトをしながら就職活動も行ったが、結局は就職先は見つからず、現在は韓国に戻って就職活動を続けている。娘3は、まずは就職をしてお金を貯めてから結婚をしたいと考えているが、周囲の人たちからは結婚を強要されていて自身との意見の相違があり、そのことから葛藤を感じていた。

娘3：(まず)就職して、就職してから落ち着くまで時間がかかるし、まあ、結婚するとしてもお金があってからできるでしょう。お金がないのにどうやって結婚できますか？(略)祝日の時に親戚に会うと、「あなた、もう結婚しなきゃならないんじゃない？」と言われるんです。それで「就職もまだしていないのに、結婚なんて。まずは就職をしなきゃ」と言うのと「就職ができないから結婚(を先に)しなきゃね」と言うんです。私はそういう話が本当に、本当に嫌なんです。それで、そういう(親族の集まり)場には行きたくないです。

しかし、母3は、娘の就職と結婚について次のように語っていた。

母3：親の立場では、それ(=結婚するの)が一番だと思います。就職も重要だけど、良い男性に出会って、まあ、お金持ちの男性に出会うことより、平凡だけど自分(=娘3)を大事にしてくれて、お互い愛し合う男性に出会って、幸せに生きて欲しいという気持ちです。それ以外に願うことはないです。ただ良い夫と結婚して、息子・娘を産んで幸せに生きてくれればいいなというのがいつもの望みです。(略)私の考えでは30歳になるまでに行きたくて(=結婚して)欲しいけど、それが私の希望通りにできるかは分かりません。(略)本人がしたいことがあればいくらでもしていいです。ただ、好きなことをしてもいいけど、結婚して良い男性と結婚して、夫と一緒にするととってもいいん

じゃないかと思っています。

このように就職と結婚に対する親子の認識のズレは、就職して経済的な能力を身につけないと自立ではないと考える娘側の内面化した規範と、良い男性と結婚して幸せな家庭を築くことが娘の自立と考える親側の規範の相違に起因すると考えられる。

娘1の場合も、大卒後の1年半は、公務員試験を受ける準備をしていたが、途中で教員採用試験に方向を変え、教育大学院に入り、今に至るまで教員採用試験の勉強を続けていた。次は、娘1の語りである。

娘1：(教員採用試験を)勉強しても、みんなが合格する試験ではないので、もう年齢もあるし、私も、うん…もう経済的に自立しなければならないという気持ちが常にあるから、早く試験に合格して、経済的に自立したいです。(略)もう大きくなって結婚する年齢になったのに、まだ家を離れることができず勉強を続けていて、安定的な職場で働いて収入があるわけではないので、(親に)いつも申し訳ない気持ちがあります。

しかし、母1は、娘の就職と結婚について次のように語っていた。

母1：本人が経済的に今は自立していないけど、それについてはあまり考えていないの。(略)うん…(試験に)受かっても受からなくても、教員になってもならなくても、就職してもしなくても結婚をさせなきゃ。まずは結婚をさせてから家から出さなきゃ。今年ね、今26歳だけど今年はず(結婚)させたいの。だから、就職ができてできなくても、そんなことは関係なく結婚をさせなきゃと考えている。良い相手がいれば今年本人がどう考えるか関係なく、とにかく結婚させよう。結婚して勉強して、(就職)してもいいから。

女性も就職しなければならないという内面化した規範をもっている娘たちは、就職できない経済不況によって学校から社会への移行の困難を経験している。さらに、就職を通じた経済的な自立を優先している娘の認識と就職よりも結婚を優先する親の認識とのズレは、成人した子どもと親の関係に葛藤をもたらしていると考えられる。特に、息子には就職による経済的な自立を求めながら、娘には経済的な自立より、経済力を持っている男性との結婚を求めるといふ、自立におけるジェンダー規範が存在していることが

確認できた。

b. 「離家」と「結婚」をめぐる親子の葛藤

結婚や就職をめぐる親子の認識のズレは、成人した娘の様々な意思決定場面に葛藤をもたらしていた。ある程度の年齢に達し、就職して経済的に自立している娘は、自ら意思決定を行うべきであるという認識を持っているが、娘の自立を結婚と見なしている親は、結婚するまでは様々な意思決定を親と共有して欲しいという期待を持っていることにより、娘は葛藤を経験していた。

娘4の場合、実家から大学までの距離が遠かったため、半年間のみ実家から離れて暮らした経験があるが、それ以後は親と同居している。一番上の姉は勤務先が実家から遠いという理由で一人暮らしをしており、二番目の姉は結婚したため、今は父、母、娘4の3人暮らしをしている。

Q：親と一緒に住んでいることについて不満とかはないですか？

娘4：あります。(笑)年をとったせいかな、今はもっと辛いと思います。…独立(=離家)したいです。自分で好きなようにして暮らしたいので。一人で暮らしてもいいと思うのは、お金もちょっと稼いでいて、今、家で(親と一緒に)暮らしているからかもしれませんが、ちょっと息苦しいです。テレビも、お母さん、お父さんのスケジュールに合わせて見なきゃならないし、ニュースばかり見て、面白いの(=番組)は全然見れなくて、早く寝なきゃならないし、早く起きなきゃならないし、だから大変です。(笑)(略)家を出て、私がやりたいように食べたいときに食べて、寝たいときに寝て、片付けたいときに片付けながら、私がしたいように生きたいです、誰かに干渉されなくて。

年齢を重ねることで親のペースに合わせなければならない生活がだんだん辛くなっているという。娘4は、30歳を過ぎてから結婚についてあまり考えなくなり、一生結婚しないで一人で生きていくことも考えていた。

娘4：昨日もお母さんにちょっと(離家の)話をしてみたけど、お母さんが涙ぐみました、(離家は)駄目だと言いながら。(略)これから(離家)しようと思います、3年以内に。結婚できなくても、親が反対しても(家を)出るつもりです、3年後に。まだお金がないので、もうちょっと貯めてから。いつまでこうやって(=親と同居して)生きることにはできないでしょう。今は、…両親も私がいなくても十分(二人で)暮らせるし、今は、お父さんがちょっと年を取って

るけど、60代は老人ではないと思います。病院にいると老人の患者をたくさん見るけど、60代は老人ではないです、まだ。70代は老人だけど、だから、心配はしなくてもいいと思います。

次は、母4の語りである。

母4：(離家は)絶対(反対)。本人が家を出て(一人で)暮らすと言っても私達は反対です。結婚して(家を出な)きゃ。今も姉達が全部(家を出て)しまっ、今でも寂しいのに、あの子まで(家に)いないと本当に寂しくて、殺風景すぎて生きてられないです。

Q：娘さんが家を出たいと言ったことはありますか？

母4：たまに、「家を出て暮らしてみたい」と。だけど、絶対(駄目)。お父さんも(私も)結婚しなければ家は出させないと(考えている)。

父4は、娘と同居している状況について「(娘4が)一緒に暮らしてくれる」ことが「ありがたい」と語っていた。

Q：今娘さんと一緒に暮らしていることについてどう思いますか？

父4：ただありがたいだけです、私はね。(娘が)一緒に暮らしてくれるから、ありがたいでしょう。

Q：どういう部分ありがたいですか？

父4：まず、子どもが一緒にいてくれるんじゃないですか？あの子(=娘4)が末っ子なんです、最後まで末っ子。だから、あの子が結婚もしないで、家を出て一人で暮らすと言ったらどうしようと心配するぐらいです。(結婚しないで)ただ(家を出ると)言うと、(家を出て)一人で暮らすというと、…まあ、そうなるとうまく止めると思います。

つまり父4は、成人した子どもが親と一緒に暮らしている状態を親孝行の行為として捉えていたのである。しかし、父4も母4と同様に「(結婚しないで)ただ(家を出る)」という娘の行為には「本当にすごく止める」という反対の立場を示していた。一方、娘3も現在、親と一緒に暮らしていることに不便さを感じていた。特に、娘3は、1年間日本に留学していたので、親と離れて暮らした経験があるので、現状についていっそう不便さを感じていた。

娘3：(親と一緒に住んでいることについて)不満…というよりは、不便さがあります。なぜなら一人で生活したことがあるから、(略)だから、体が(一

人暮らしに)なれてしまったことがあります。親は未だに10時半ぐらいになって(私が)家に帰らないと、「どこ?いつ帰るの?」と電話します。…だけど、たまには遅くまで遊びたい時があるんですよ。実は…今通っている塾でちょっとトラブルがあって、だけど、そういう話は親に言うことができません。なぜなら、今通っている塾は親に(金銭的な支援を)お願いして通っているのに、問題があると言うと親は心配するんじゃないですか。だから、そういう話はいけません。ずっと一人で抱えていたので、大学時代の友達に会って気晴らしがしたくて、家(=親)には「今日は遅くなるから、心配しないで先に寝てください」と話しました。(略)だけど、夜中に帰ってきたら、その時間まで(親が)寝ないで待っていたんです。そういう部分がちょっと不便です。そして朝までゆっくり寝たいときに寝れないことも(不便です)。(笑)

しかし、娘3が親に認められる離家の理由は「結婚」なのである。

娘3：(就職は)韓国よりは日本でしようと思っています。親には申し訳ないけど私は外国で暮らした方がもっといいと思います。(略)できれば一生外国に住む可能性もあります。(外国で暮らすことについて親は)歓迎しないと思います。だけど…、(略)「あの子は、(外国に)出るだろう」と心で考えていると思います。だから、ちょっと申し訳ない気持ちがあります。(略)もし、ソウルで就職すれば(離家は)難しいと思います。(就職先が)ソウルになると…うちの親は結婚するまでは側に置いて暮らしたいと思うので。「一緒に暮らさなきゃ」とは言わないけど、態度を見ると分かりますよ。「韓国にいるなら結婚するまでは、地方に行かない限り(親と)一緒に暮らす」と。

結局、娘3は、結婚ではなく「韓国よりは日本」で就職することで、離家を果たそうと考えていた。娘3の場合、親から離家を認められる理由は、「結婚」や「実家から遠い就職先」ということ以外は考えられなかったのではないだろうか。

4. 結論

分析の結果、大学の専攻選択をめぐる親子間の意思決定の過程では、以下のような知見が明らかになった。まず、親子間に意見の相違が生じた場合、親側は、娘が親の意見に従うように説得を行い、そのときに用いられる説得の論

理は、「親の反対は子どものためである」ことや「孝規範」といったものであった。娘側は、自分の将来や自分で決めるべきという「自己決定意識」と「親の言うことを逆らうのは親不孝」という規範の間で葛藤を経験していた。さらに、親と子の間には、経済的な資源差によって親の意見に従わざるを得ないという権力構造も確認できた。

また、学卒後に娘達は就職して社会的な自立を目指すのが、経済不況という社会構造によって経済的に自立することで困難を経験する。さらに、「就職よりも結婚が先である」という親の「結婚規範」と戦わなければならない。親たちが支持する「娘の自立は結婚」という規範は、「結婚するまでは自立ではない」、つまり「結婚するまで親元について欲しい」という考えと結びつき、親元を離れて暮らそうとする娘の希望との間で葛藤を生じさせることになる。

大学の専攻や就職といった自立のイベントにおいて、親の希望を強制されるのは息子と娘の事例に共通して見られる構造であった。そして、親の行為を正当化するために、「親の反対は子どもの未来のため」、「孝規範」という規範装置が用いられることも息子・娘の親に共通して見られた。しかし、親が認識している子どもの自立には大きな違いが見られた。息子の場合、親側が経済的・社会的な成功を自立と見なし、より地位の高い就職先を目指して大学の専攻を強制していたが、娘の場合、「良い就職」よりは「良い結婚」のための強制が強く見られた。親は、息子には家族を養う経済的な能力を、娘には「親への依存」から「配偶者への依存」の移行を子どもの自立として考えるのではないだろうか。

以上のことから、親と子どもで異なる規範に準拠し、その中で親側の意向が強く働いていることが若者の自立を困難にしている現実が明らかになった。このことは、従来の「若者論」(宮本, 2004)が強調してきた若者の経済的な条件の改善や若者の労働への参加を促す教育の重要性以外の若者の自立を可能にする提案を引き出すものである。

それは、韓国の親たちは彼らの子どもが置かれている現実への理解が不足しているのではないかということである。すなわち、若者の自立のための教育は、若者のみならず、その親たちをも対象に行われるべきであると考えられ

る。ただし、それは、強い父性や母性を強調するといった家族主義的な教育というのではなく、若者自身が生きている世界を親たちがもっと理解するべきという意味においてである。

最後に、本研究は、4家族の事例に基づいた分析であり、韓国社会へ一般化することは無理がある。また、本研究は娘の自立イベントにおける親子の認識の相違を明らかにすることに焦点を当て、なぜそのような認識の相違が起きているのかを分析するまでは至らなかった。このような課題については、今後の研究課題にしたい。

(注)

- 1 分析は、対象者の許可のもとで得たインタビューの録音データと著者のフィールドノーツに基づいて行った。録音データは、すべて文字起こししたうえで、日本語に訳した。日本語のネイティブチェックをしてもらう際、韓国語のニュアンスに近い日本語を選ぶために協議を行った。データは、必要に応じて補足((括弧)で囲んだ)や、省略((略)で示した)を行っている。

(文献)

- 本田由紀, 2009, 『仕事と若者』日本図書センター。
- 宮本みち子・岩上真珠・山田昌弘, 1997, 『未婚化社会の親子関係—お金と愛情にみる家族のゆくえ』有斐閣選書。
- 宮本みち子, 2004, 『ポスト青年期と親子戦略』勁草書房。
- 田淵六郎, 1996, 「主観的家族論——その意義と問題」『ソシオロギス』20: 19-38。
- 田淵六郎, 1999a, 「『家族戦略』研究の可能性——概念上の問題を中心に」『人文学報』300: 87-117。
- 田淵六郎, 1999b, 「家族戦略と現代家族の変容」庄司興吉編, 『共生社会の文化戦略』梓出版社, 43-67。
- 우석훈·박경일, 2007, 『88 만원세대—절망의 시대에 쓰는 희망의 경제학』레디앙。
- 山田昌弘, 1999, 『パラサイト・シングル時代』ちくま新書。
- 尹鈺喜, 2009a, 「韓国における若者の『自立意識』と親子関係——韓国の親子関係と若者の自立への葛藤に注目して」お茶の水女子大学大学院人間文化研究科編, 『人間文化創成科学論叢』11: 489-498。
- , 2009b, 「韓国の親-息子関係における若者の自立の困難——父・母・息子のインタビュー・データの家族戦略的分析」お茶の水女子大学グローバルCOEプログラム「格差センシティブな人間発達科学の創成」, 『PROCEEDING 08』, 49-57。

Independence of Premarital Young Females in Korea : Analyses of Father-Mother-Daughter's Interview Data

Jin-Hee YOON
(Interdisciplinary Gender Studies)

The purpose of this study is to explore how the parental expectations are given priority over those of daughters in decision-making process in Korea. I also examine the parents-daughter relationship that the young daughters from becoming independent. I conducted in-depth interviews with unmarried females who are living with their parents, and with their parents (both mothers and fathers) in August 2008-2009. Qualitative analyses of the data indicate that in the decision-making such as choosing university majors, occupations and marriages, the expectations of the parents were given priority over those of the daughters.

This was frequently justified by parents using the rhetoric that the parents' decisions were made for the sake of their daughter's future, namely that the parents' decisions are for that their daughter can marriage with more high level's man. On the other hand, the daughters worried between to become independent in socially and to maintain a satisfactory parents-daughter relationships. However, finally the daughters accepted parents' strategic plans, namely, choice the marriage, in order to independent from their parents. This can be interpreted that the daughters' behaviors were also strategic because they tried to profit from the parental guidance. These "strategic" behaviors by parents as well as daughters are primary factors in making premarital females' independence from their parents difficult in Korea.

Keywords: premarital young females, independence, parent-daughter relationships, strategies,
korean society